資　料　集

第 十三 輯

太宰治・句帖「亀の子」

青森県近代文学館

目　次

太宰治・句帖「亀の子」……1
解説　太宰治・句帖「亀の子」について
米田省三……29

太宰治・句帖「亀の子」

太宰治句帖「亀の子」（小館保旧蔵）

太宰治句帖「亀の子」（小館善四郎旧蔵）

刊行にあたって

青森県近代文学館では、本県近代文学への理解を深め研究に資するために、隔年で「資料集」を刊行しています。

これまで、第一輯『有明淑の日記』、第二輯『太宰治・晩年の執筆メモ』、第三輯『太宰治・原稿「お伽草紙」と書簡』、第四輯『石坂洋次郎・原稿「マヨンの煙」』、第五輯『太宰治・旧制弘高時代ノート「英語」「修身」』、第六輯『青森県近代文学年表』、第七輯『今官一・未発表作品集「月下点」他』、第八輯『寺山修司草稿「狂人教育」』、第九輯『北畠八穂草稿〈「ホーイ」ってあの返事。…〉』、第十輯『太宰治・明治高等小学校時代の学習ノート二種「豫習用讀方帖」「入学試験　運算」』、第十一輯『太宰治・旧制弘高時代ノート「化学」』、第十二輯『葛西善蔵・原稿「姉を訪ねて」』を刊行してきました。

本年度は、第十三輯として『太宰治・句帖「亀の子」』を刊行します。「亀の子」は、若き日に俳句に親しんだ太宰が残した直筆の句集であり、当館では小館保旧蔵のものと小館善四郎旧蔵のものの二冊を所蔵しています。それらには筆致や用字、収録内容において相違する点が認められますが、両者を写真版で比較するのは、従来は叶わないことでした。本資料集が、太宰文学における俳句の位置というものを浮き上がらせ、研究のさらなる進展に繋がることを期待します。

刊行にあたり、お力添えいただきました関係各位に厚くお礼申し上げます。

令和五年三月十五日

青森県近代文学館

『太宰治・句帖「亀の子」』凡例

□小館保旧蔵の「亀の子」

集印帳（布製の表紙付、蛇腹状の折り本形式、中紙は片面二十四頁、サイズは縦一六〇ミリ×横一一〇ミリ×厚さ二二〇ミリ）に墨書きされたもの。第一頁に存在する「蕾」「朱蕾愛藏」の印だけは朱色。太宰の句が登場するのは第二十三頁までである。

□小館善四郎旧蔵の「亀の子」

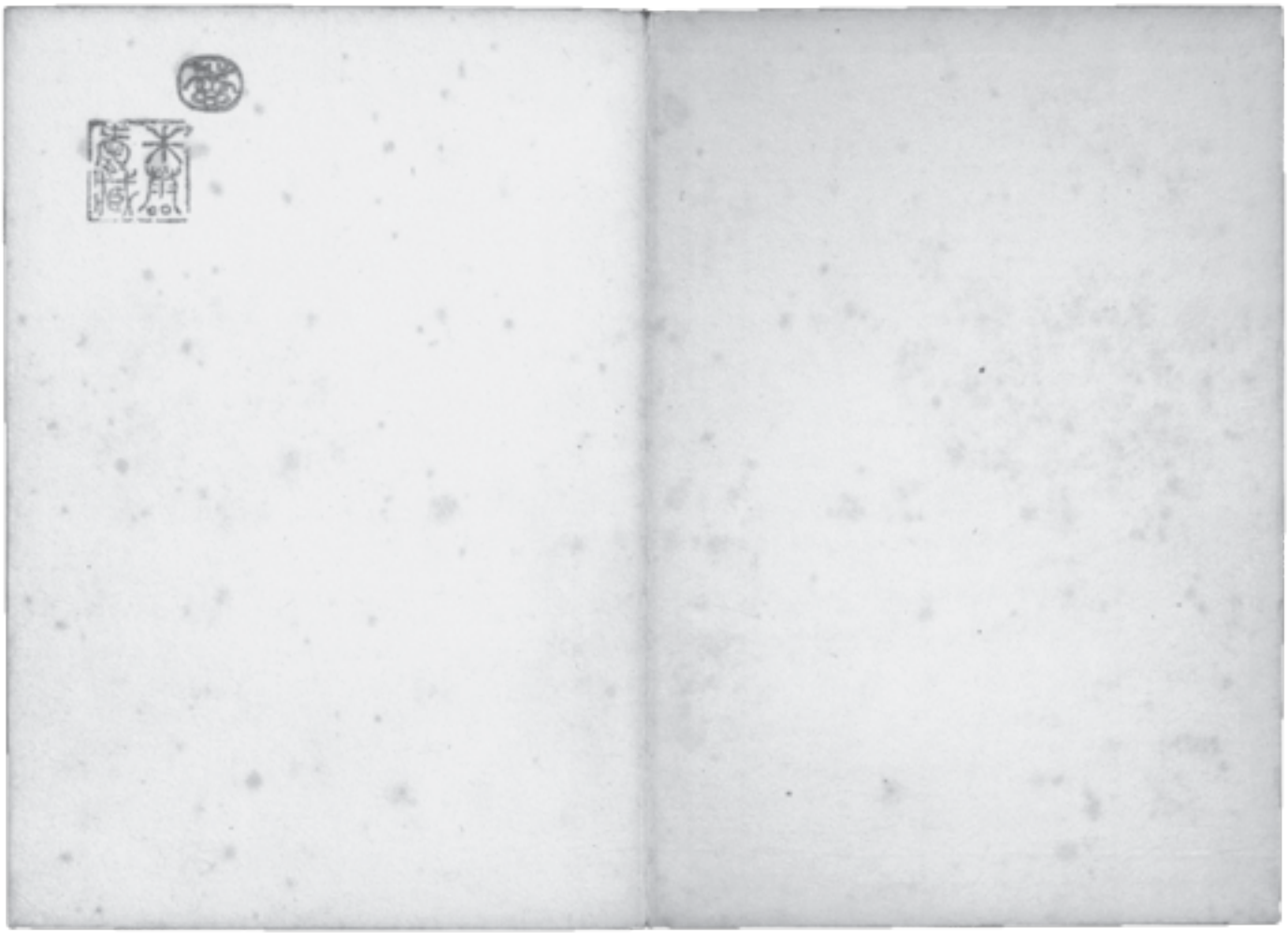
集印帳（布製の表紙付、蛇腹状の折り本形式、中紙は片面二十四頁、サイズは縦一六〇ミリ×横一一〇ミリ×厚さ二二〇ミリ）に墨書きされたもの。太宰の句が登場するのは第二十一頁までである。

□「資料集」の構成

本資料集は、二冊の句帖の写真版と解説から成る。句帖は基本的に二頁分開いた状態で縮小して資料集の一頁に収め、写真の下側に〔第一頁〕のように資料内における位置を明記した。なお、小館保旧蔵の句帖の第二十四頁及び裏表紙見返しと、小館善四郎旧蔵の句帖の第二十二頁から第二十三頁には太宰の揮毫はなく、編集の都合上割愛した。

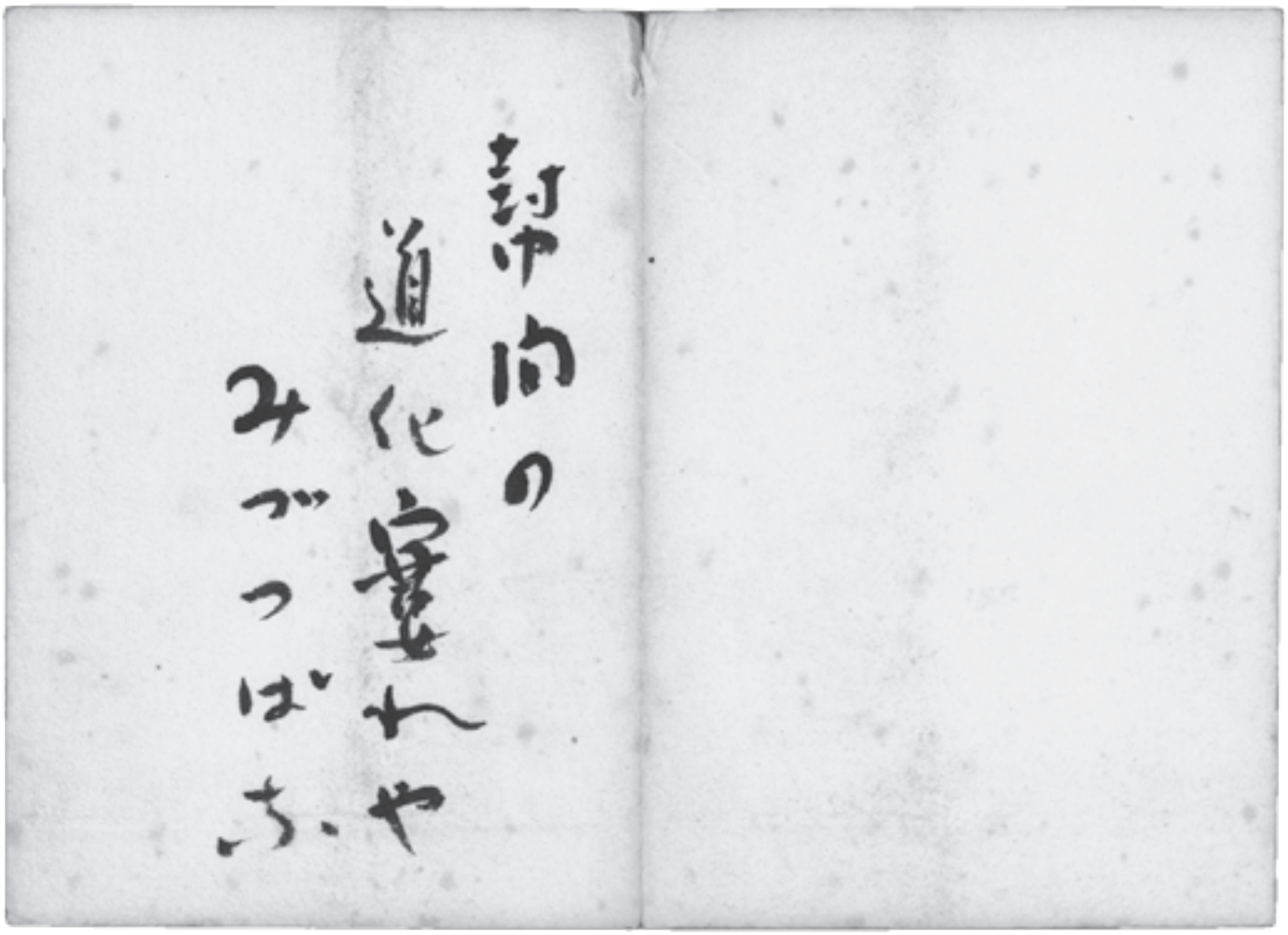
小館保旧蔵の句帖「亀の子」

〔表表紙〕



〔第一頁〕

〔表表紙見返し〕



都内の
道化宴れや
みづつばふ

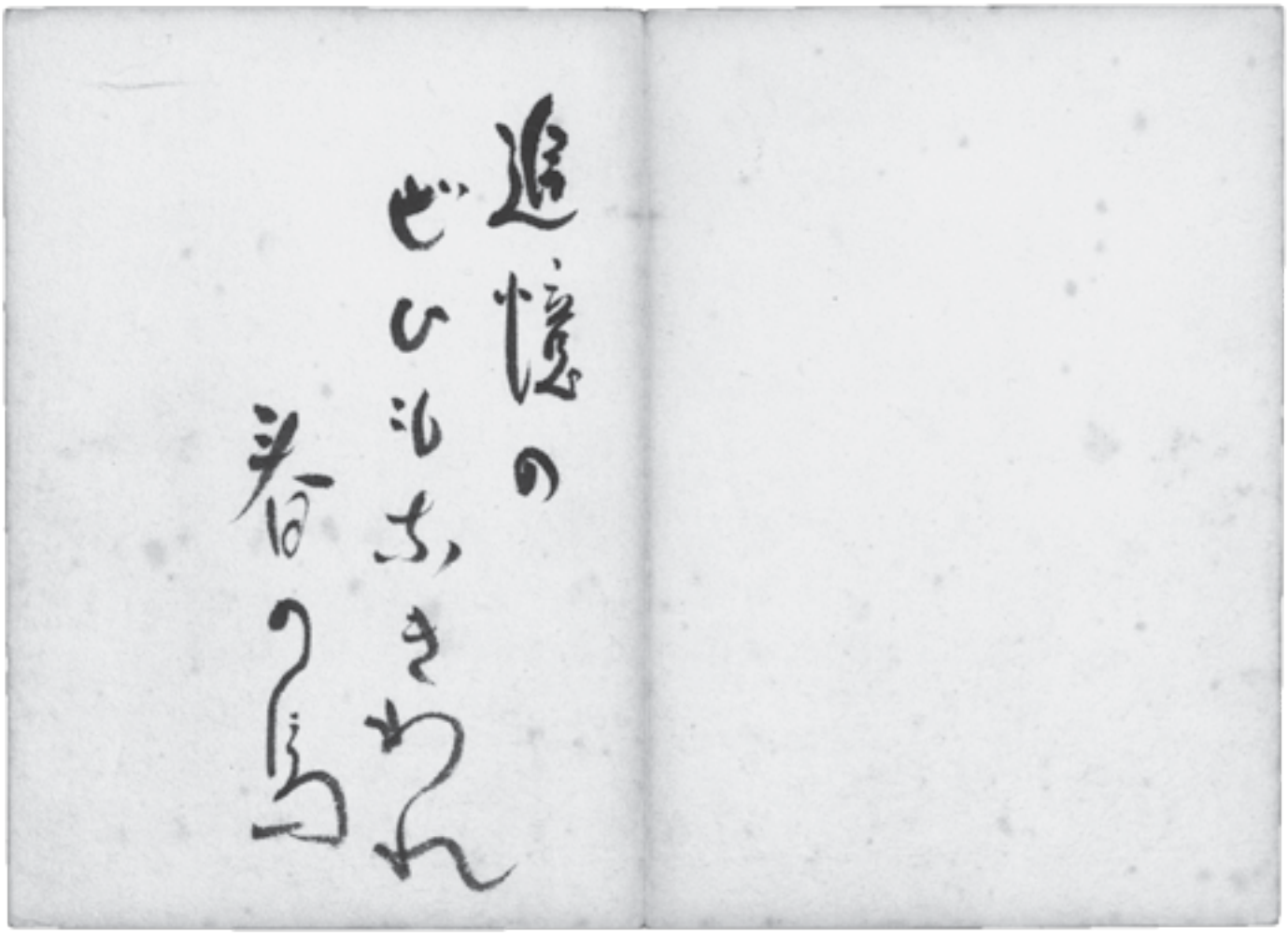
〔第二頁〕

〔第三頁〕

川をゆつて
おちからに苦
ぬるむ水

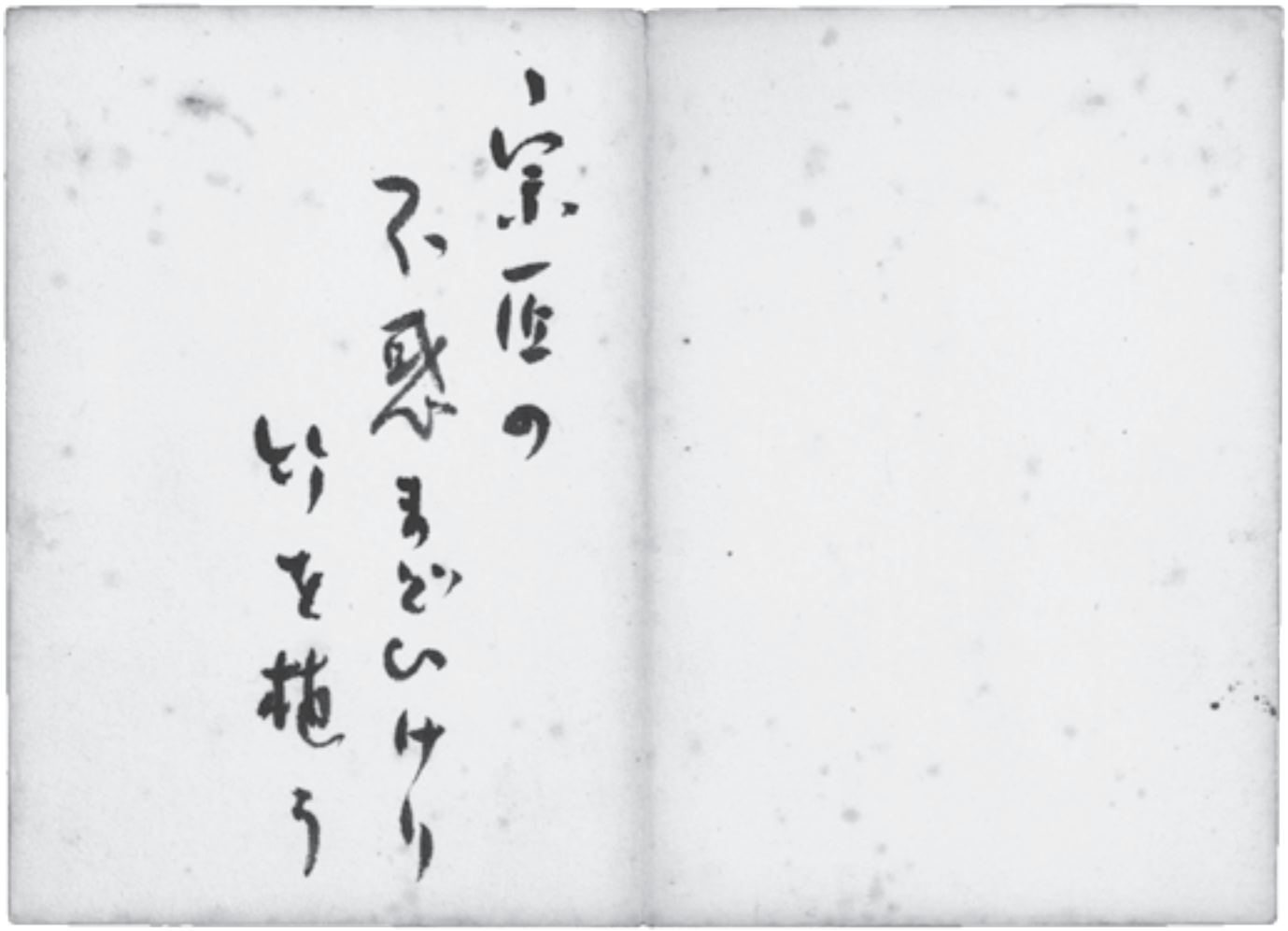
〔第五頁〕

〔第四頁〕



〔第七頁〕

〔第六頁〕



小家一位の
不思議なるひけり
とりを捕う

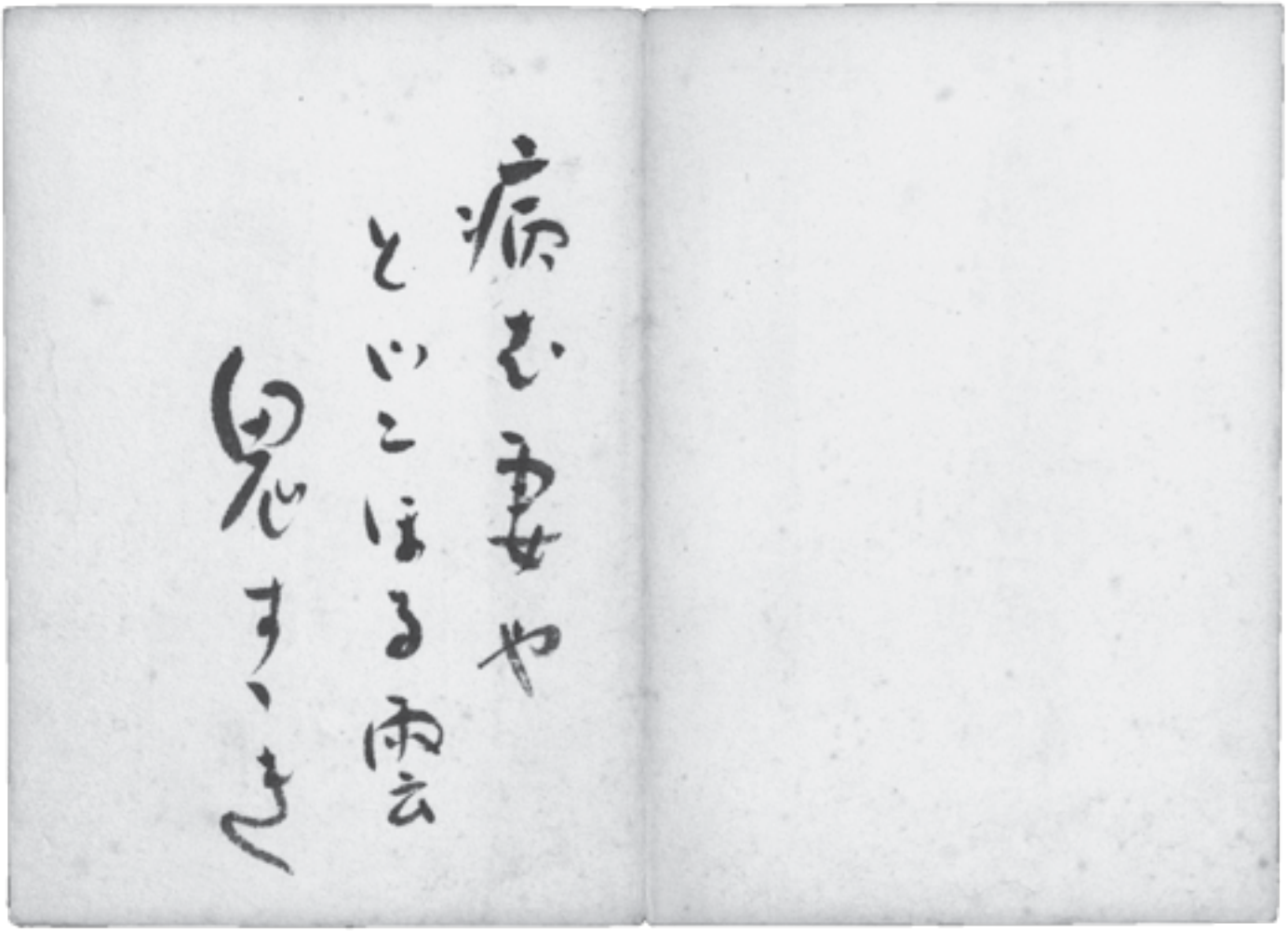
〔第九頁〕

〔第八頁〕

ひとりわて
紫こいこい
すふつぱら

〔第十一頁〕

〔第十頁〕



病む妻や
とゞこほる雨云
鬼すゝき

〔第十三頁〕

〔第十二頁〕

旅人よ
ゆくて郡ざらー
知るやいさ

〔第十五頁〕

〔第十四頁〕

こがらしや
肩寒き身の
俳三昧

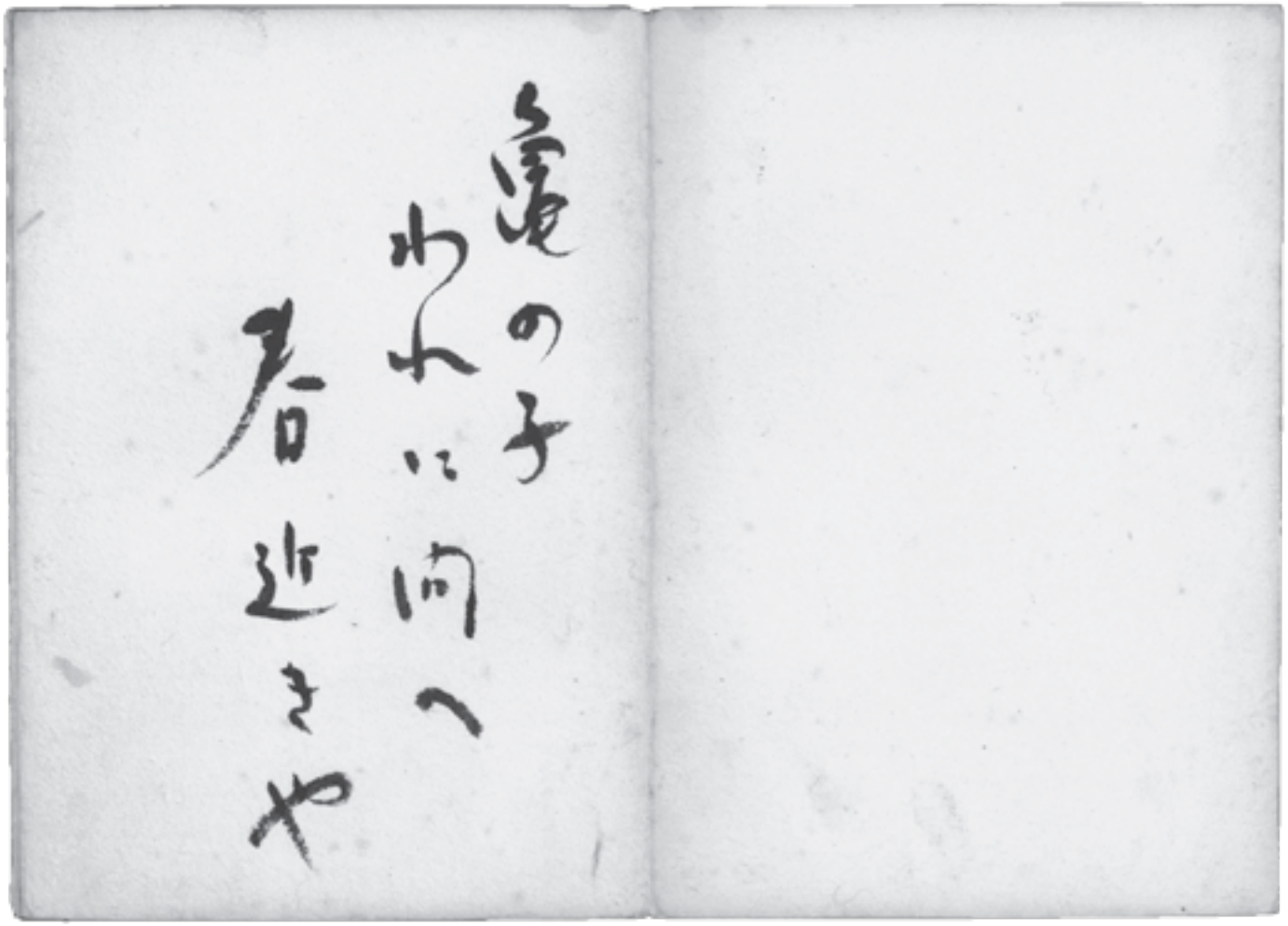
〔第十七頁〕

〔第十六頁〕

今朝は初雪
あゝ
誰もわふいのだ

〔第十九頁〕

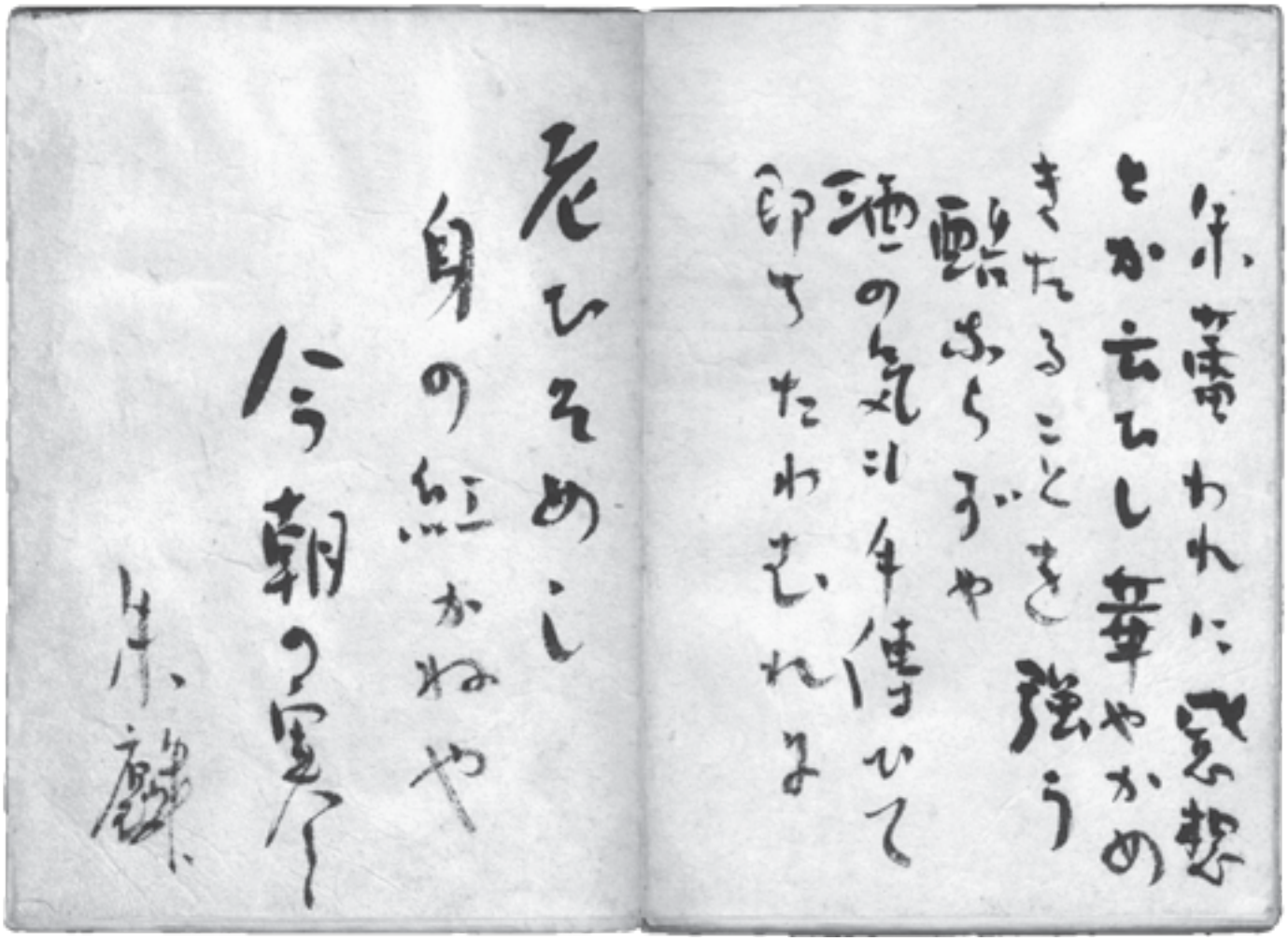
〔第十八頁〕



亀の子
われに向へ
春近きや

〔第二十一頁〕

〔第二十頁〕



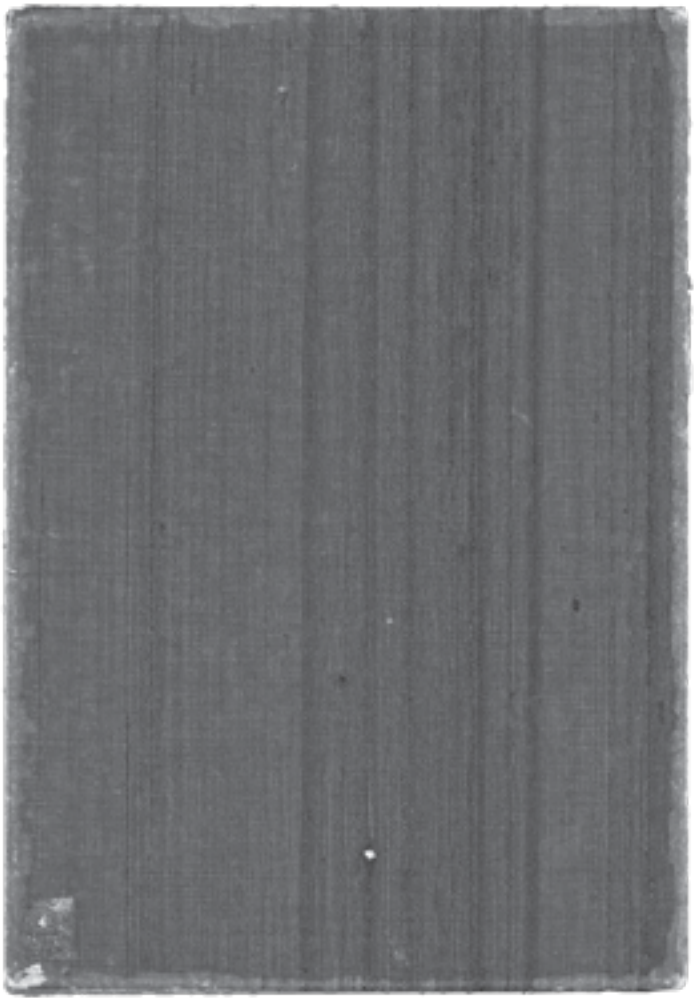
年幕われに感慨
とか云ひし華やかめ
きたることを強う
鮎ふらずや
酒の気に年傳ひて
印されたわれよ

花ひそめし
身の紅かねや
今朝の冬

朱麟

〔第二十二頁〕

〔第二十三頁〕



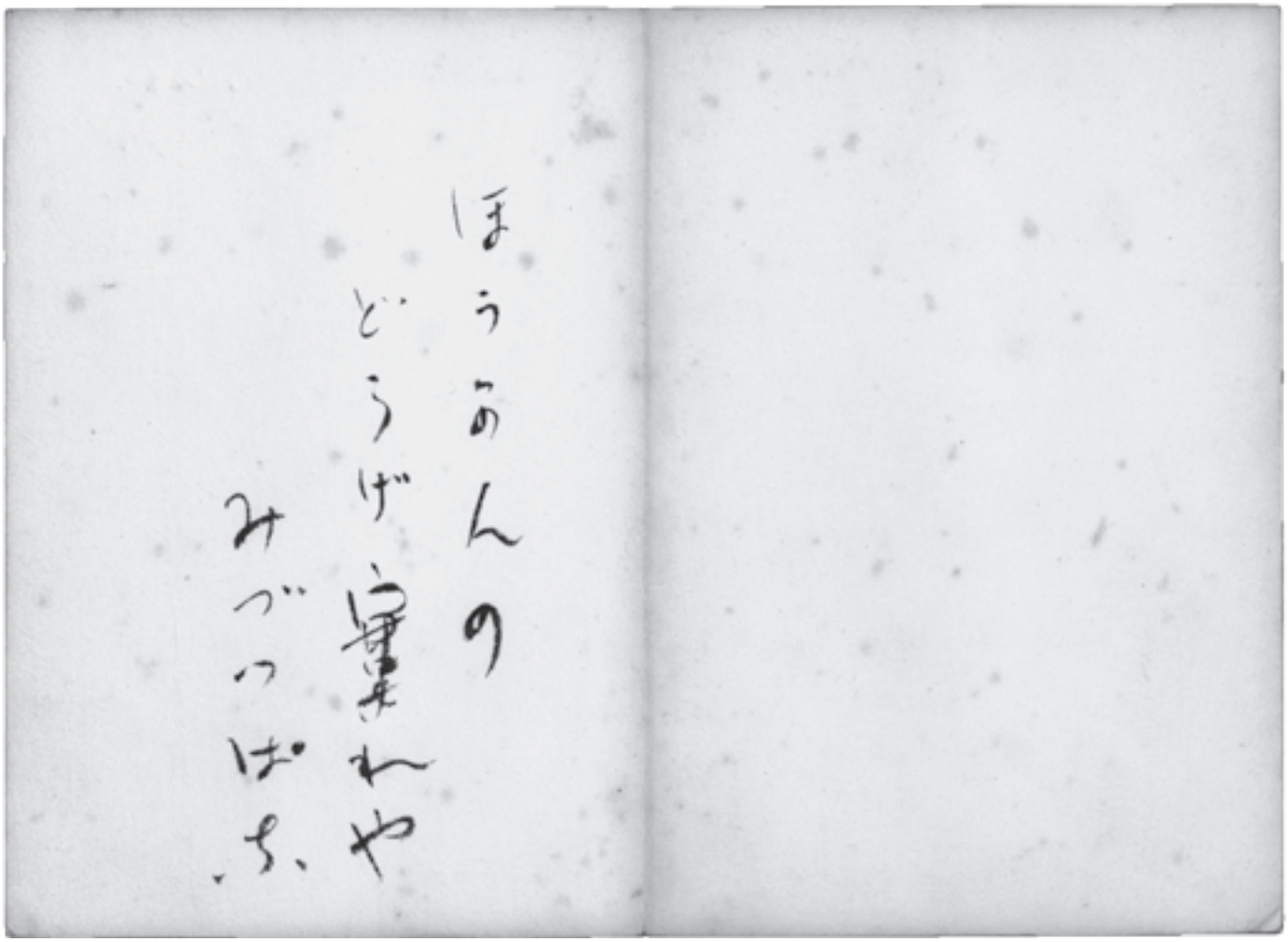
〔裏表紙〕

小館善四郎旧蔵の句帖「亀の子」

〔表表紙〕

〔第一頁〕

〔表表紙見返し〕



ほうおんの
どうげ葉れや
みづつぱち

〔第二頁〕

〔第三頁〕

川を切って
おもおもらし苦
ゆるむ氷

〔第五頁〕

〔第四頁〕

追懐の
ぜひしたきれて
春の鳥

〔第七頁〕

〔第六頁〕

宗匠へ

不盛まどひけり

けりを植う

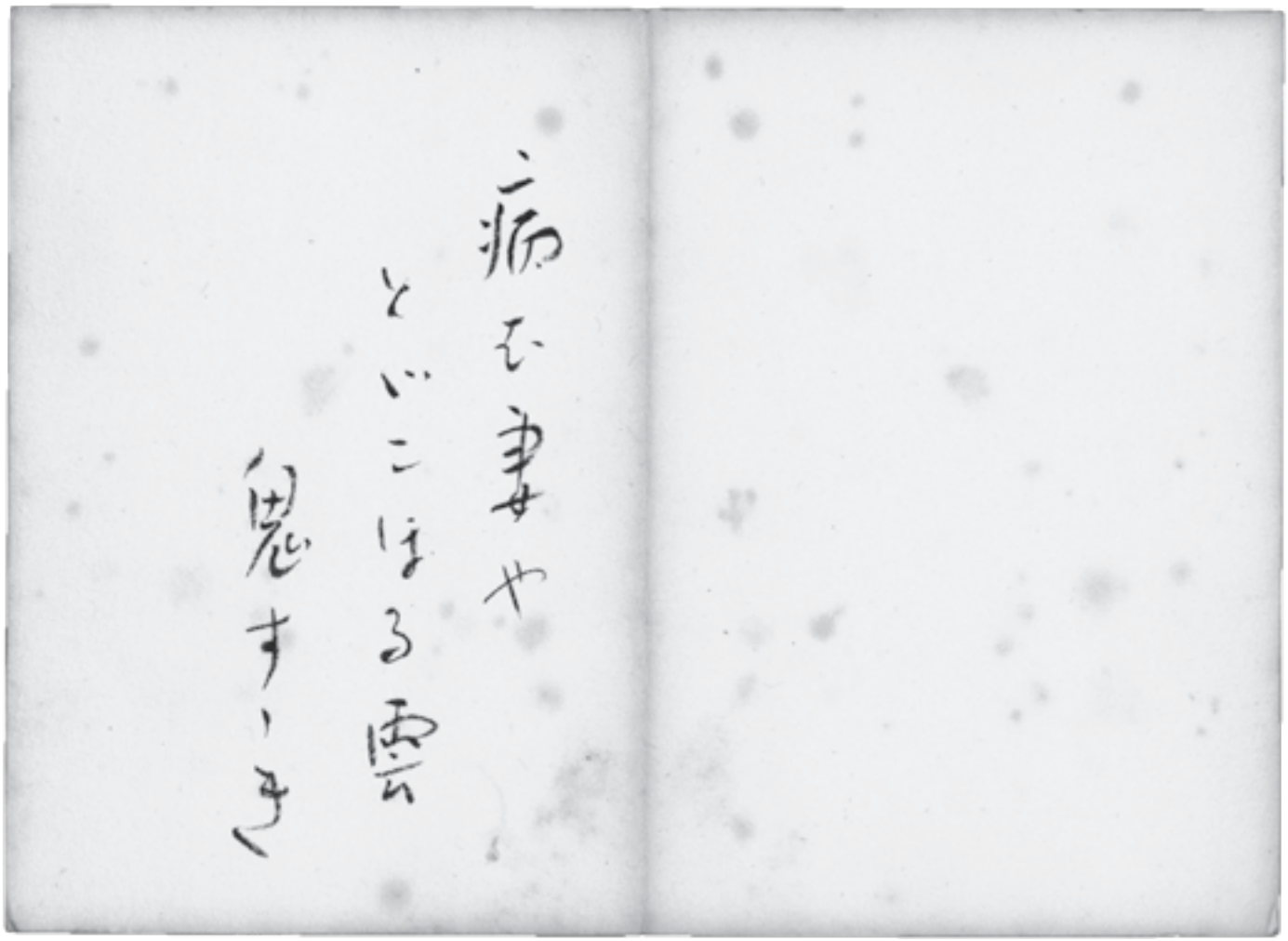
〔第九頁〕

〔第八頁〕

ひとりねて
蛍こいこい
すすきつばら

〔第十一頁〕

〔第十頁〕



病む妻や
とびこはる雲
鬼すいき

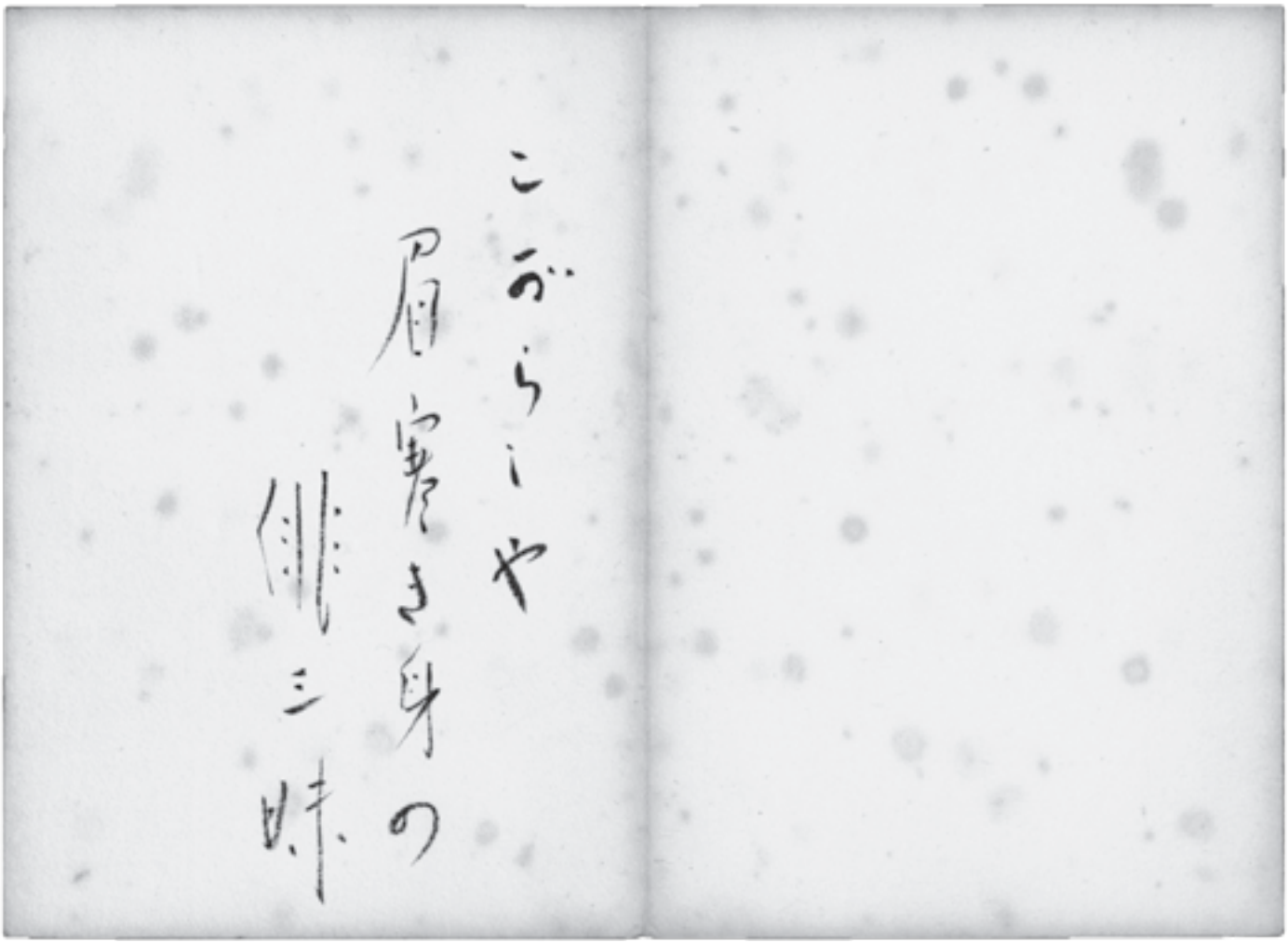
〔第十三頁〕

〔第十二頁〕

旅人よ
ゆくて野さらし
知るやいさ

〔第十五頁〕

〔第十四頁〕



こがらしや
眉寄き身の
俳三昧

〔第十七頁〕

〔第十六頁〕

今朝は初雪
あゝ
誰もみたいのだ

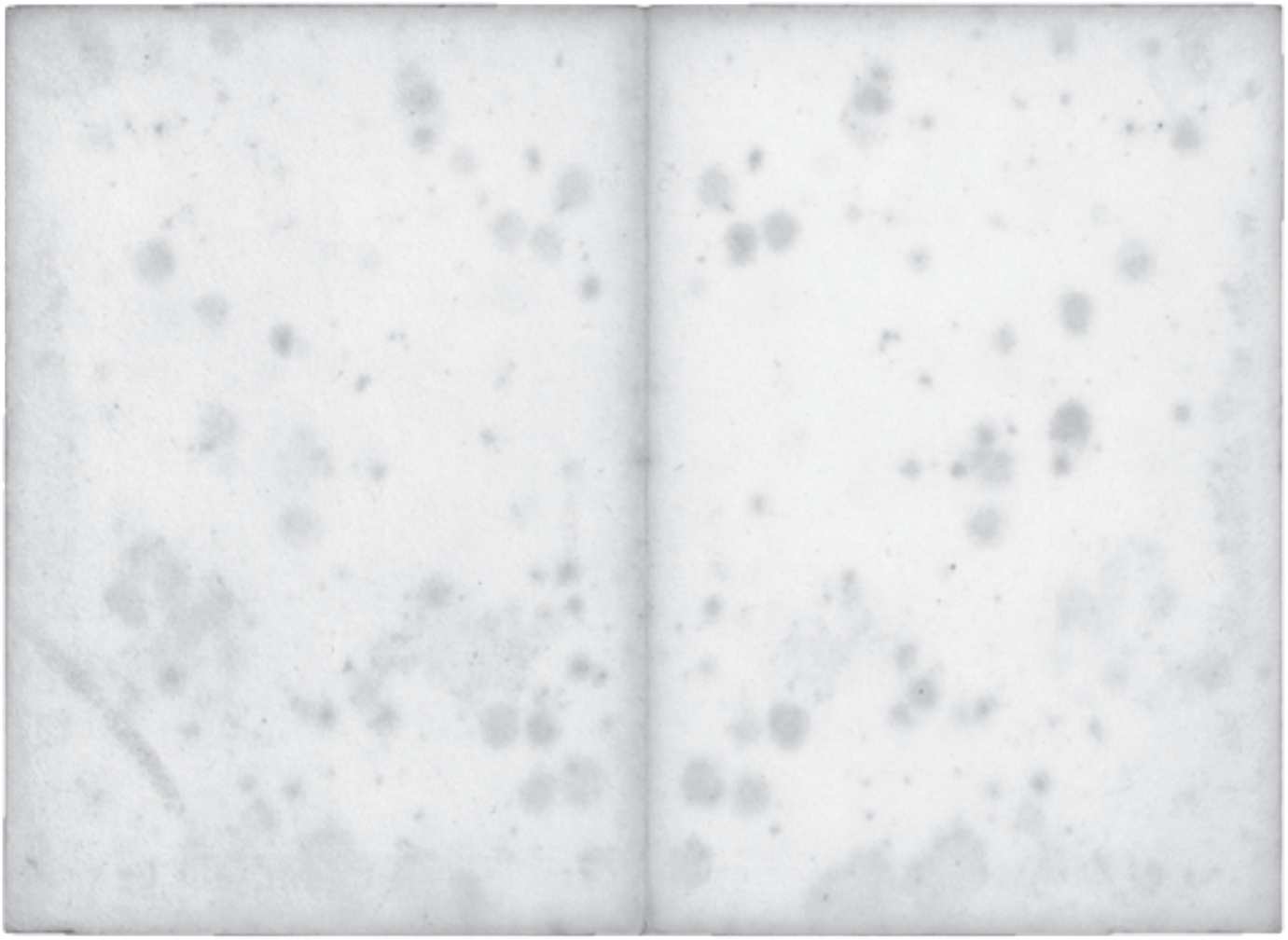
〔第十九頁〕

〔第十八頁〕

亀の子
われよ向へ
春ちかきや

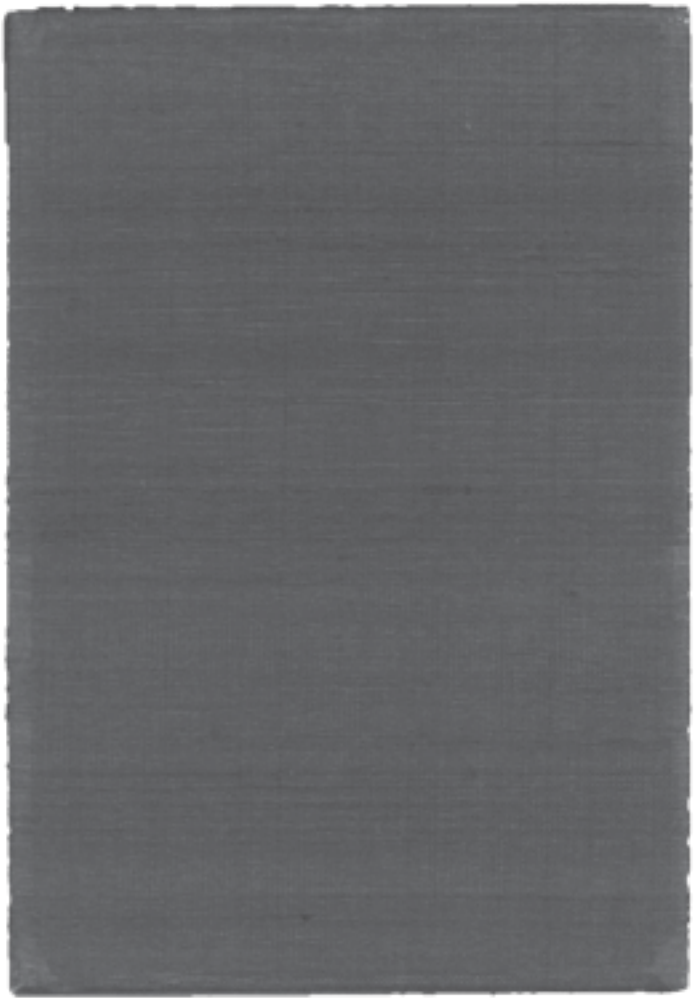
〔第二十一頁〕

〔第二十頁〕



〔第二十四頁〕

〔裏表紙見返し〕



〔裏表紙〕

解説　太宰治・句帖「亀の子」について

米田　省三

一　太宰治の句集について

自筆句集「亀の子」は、太宰の四姉きやうが昭和三年に嫁いだ小館貞一の弟に当たる小館保、善四郎が所蔵していたものである。

保所蔵のものは、昭和二十三年「八雲」十一・二月号に紹介されている。その時の編集子のコメントに、「これは集印帳に墨書してある。……なおこれと全く同じ句集を他の友人にも二三與えてある由である」とある。これによると、同様の句集が複数あるというが、その一つが善四郎所蔵のものである。なお久保喬は、昭和八年初夏、天沼の太宰宅を訪ねた際「肉筆の句集などを出して見せ」「思ひ出はせんすべもなしや春の鳥」という句があったと述べている。（『太宰治の青春像　人と文学』（昭和五十八年五月・六興出版）この句は小館兄弟所蔵の句集にはないので、他にも句集が存在していたものか。

「亀の子」の成立時期であるが、善四郎の「片隅の追憶Ⅰ―白金三光町―」（『太宰治研究』第六号・昭和三十九年十月・審美社）によると、太宰が白金三光町の大鳥圭介旧邸に移り住んで間もなく、誰かが亀の子を買ってきて池に放したという。そして、「その時分、太宰が自作の十句を選んで句帖に書いた末尾の一句が―亀の子われに問へ春近きや。―であった。句帖は亀の子と題した」とある。井伏鱒二は、亀は太宰が買ってきて放ったと記しているが、（新潮社版『太宰治集』上巻解説・昭和二十四年十月）いずれにしろ亀は、大鳥旧邸でのことである。太宰はここに昭和七年九月から翌八年二月までおり、句集ができたのは八年正月以降のことと推測される。

二　小館保旧蔵「亀の子」

1　小館保と太宰治

小館保（1912～1987）は、製材業を営む小館保次郎（後に保治郎に戸籍変更）の次男として、青森市に生まれた。旧制青森中学、その後昭和五年四月明治大学予科に進学した。太宰より二歳年少のよき弟分であり、朱蕾と号して太宰と俳諧の運座を行い、保にも自筆の句集「宗匠」と「夏草」がある。保は所帯を持ち、昭和七年十一月に太宰の筋向かいに越してきて、ここで長男が誕生、太宰が多哥志と命名してやったという。今回紹介する句集「亀の子」は、保没後、その管理にあたっていた多哥志氏が、平成十六年青森県近代文学館に寄贈したものである。

2　句集の体裁

句集は、縦十六センチ、横十一センチ、厚さ二・二センチの縦長、蛇腹状の折り本形式で、表紙及び見返しを除いて片面二十四頁である。表紙は布製、題簽に「亀の子」と墨書されている。中紙の最初の頁（第一頁）の左上隅に、「蕾」の丸印と「朱蕾愛藏」という角の蔵書印が押されている。

3　句集収録の俳句

太宰は第三頁から奇数の頁毎に一句ずつ墨書し、偶数の頁は原則空白にしている。どの句も三行に分けて墨書している。ここでは便宜上、行の区切れに／を入れた。

第三頁　幇間の／道化窶れや／みづつぱ奈（な）

太宰の旧制弘前高校時代の蔵書『評釈其角の名句』（岡倉谷人著）の表紙裏に、「自嘲　大川端道化に窶れ幇間の」とあるが、その改作であろう。芥川龍之介の「自嘲　水洟や鼻の先だけ暮れ残る」を意識し「みづつぱな」としたものと思うが、これによりイメージが具体化し、俳句らしい形になった。

第五頁　爪を切つて／ゐ奈（な）可（が）らも苦／ぬるむ水

この句、「ゐながらも苦」で切る説と「苦ぬるむ水」でひとまとまりとする説があるが、太宰が「ゐながらも苦」で切っているので、それに従うべきであろう。「苦ぬるむ水」説は、「苦」

を「にが」と読み、春の季語「水ぬるむ」を転じた太宰の造語とする。

第七頁　追憶の／ぜひも奈（な）きわれ／春の鳥

前記久保喬の著書にある「思ひ出は」と同想。あるいはこの句の改作か。「追憶」するのは、故郷津軽での懐かしい人々や出来事か。

第九頁　宗匠の／不惑まどひけり／竹を植う

自らを不惑の宗匠に擬している。不惑の年齢に達した宗匠ではあるが、なにかと分別を失うことが多く、今も迷いながら、竹酔日に竹を植えると根付くというので植えてみたのだが……。「不惑まどひけり」と諧謔を弄し、惑いながらもようやく文学に本気を出そうという決意を詠んでいるのかもしれない。

第十一頁　ひとりゐて／螢こいこい／す奈（な）つぱら

孤独感を漂わせながらも、童謡風の句調と相俟って、どこか人懐かしさを感じさせる。岸本尚毅は『文豪と俳句』（令和三年八月・集英社）の中で、「道化の華」に登場する真野と関連させて鑑賞している。真野は小さい頃火傷をし「ほたる」と呼ばれていた。主人公の葉蔵はその真野に心ひかれる。螢に、「ほたる」をダブらせているのではないだろうか。

第十三頁　病む妻や／とゞこほる雲／鬼すゝき

太宰が昭和七年、淀橋柏木の借家にいた頃、小館善四郎に庭にあるススキを鬼ススキという種類だと教えたという。（山内祥史『太宰治の年譜』・平成二十四年十二月・大修館書店）あるいは、この家での体験がもとになっているか。句は三段切れで、名詞がポンポンと置かれ叙述語がない。短編「葉」は、連句の歌仙形式を踏まえていると指摘され、この句も一断章として挿入されているが、句自体三つの断片の組み合わせのようでもある。

第十五頁　旅人よ／ゆくて野ざらし／知るやいさ

芭蕉の「野ざらしを心に風のしむ身哉」を念頭に置いての句。この句を発句とした「旅人」という三吟十二句の連句が保の自筆句帳「夏草」の終わりに記されている。太宰の発句が季語を伴わない等、連句の決まりにとらわれない自由なもので、いっときの座興として巻かれたものであろう。

第十七頁　こ可（が）らしや／眉寒き身の／俳三昧

「眉寒き身」で、不如意な人物の姿が浮き上がる。することもなく、俳句にふけったりしていて、と自嘲している。

第十九頁　今朝は初雪／あゝ／誰もゐ奈（な）いのだ

口語、破調の句。七・五・五と読むむきもあるが、七・二・八と読みたい。太宰は瀧井孝作の句集を読んでいる。瀧井は折柴と号し、当時は自由律新傾向俳人としても活躍していた。太宰が様々なスタイルの俳句に興味を示していたという一方、文人の俳句として関心を持っていたと思われる。山岸外史が『太宰治おぼえがき』（昭和三十八年十月・審美社）で、「雪の話は、太宰の故郷の美しい追憶をはてしなく語ってゆくようであった」と述べている。初雪の時思い浮かんだのは、あるいは故郷のことではなかったか。

第二十一頁　亀の子／われに問へ／春近きや

四・五・六音の破調。籠居生活を送っているような我が身と、甲羅の中に首を入れて縮込まる亀の子を重ねている。いつ春が来るのか尋ねたいのは、実は自分自身なのであろう。

以上十句が、太宰が選出したこの時期の代表句である。「みづつぱな」の冬の句から始まり、季節は春から夏、秋へと進み、（芭蕉の句を下敷きにした「旅人よ」は秋の句と考えられる）再び冬に戻って「春近し」で終わる。おそらく時系列で編輯しようという意図が働いたものであろう。最後二句を破調で纏めたことにも旨意が感じられる。

第二十二頁　朱蕾われに感想／とか云ひし華やかめ／きたることを強う／酷奈（な）らずや／酒の気も手傳ひて／即ちたわむれ尓（に）

朱蕾に句集を渡す際、感想を乞われたということで、次の句の前書きとなっている。句と併せて句集全体の後書きとしても

読める。

第二十三頁　老ひそめし／身の紅かねや／今朝の寒／　朱麟

朱麟は太宰。朱蕾の求めに応えた即興の挨拶句。自分の句集を派手な言葉で賛したところで、老い始めた身に紅やかね（お歯黒）で装っている芸妓のようなもの、恥ずかしいばかりである、と謙遜している。第一句目の「幇間の」の句に通うところがあり、それを意識していたか。首尾照応している。なお、仮名遣いの混同が見られ、正しくは「強う」が「強ふ」、「たわむれ」が「たはむれ」、「老ひ」が「老い」でなければならない。

三　小館善四郎旧蔵「亀の子」

1　小館善四郎と太宰治

小館善四郎（1914～2003）は、保の弟。旧制青森中学を経て昭和七年四月帝国美術学校西洋画科に入学、以後太宰のところに頻繁に出入りし目を掛けられた。特に美術専攻ということで、同じ芸術を志す者として、太宰は助言を与えていた。「ダス・ゲマイネ」には画学生として登場する。なお、口述筆記も依頼されており、太宰の信頼が厚かった。昭和十一年七月の『晩年』出版記念会にも出席しているが、それから数ヶ月後、善四郎は太宰の妻の初代と間違いを犯し、翌年三月、そのことを太宰に打ち明けた。太宰と善四郎の蜜月は終止符を打ち、善四郎は帰郷する。以後太宰との接触はなかったが、善四郎の妹れい子宛の昭和二十一年八月二十四日付の太宰書簡に、「私は四郎君の今後の家庭生活の幸福をいつでもひそかに祈つてゐました、秋頃には四郎君に案内していただいて十和田湖へ行つてみたいと思つてゐます」とあり、太宰は親愛の情を見せていた。しかし、太宰の死とともに二人が旧に復することは叶わなかった。

今回紹介する善四郎旧蔵の句集は、太宰治長女津島園子氏の手を経て、平成二十六年に青森県近代文学館に寄贈されたものである。

2　句集の体裁

保旧蔵のものとほぼ同じで、表紙の布の色が多少違う程度である。題簽「亀の子」の文字はやや細めで、中紙に墨書されている俳句も同様である。

3　句集収録の俳句

基本的に同じ句が同じ順に収められているので、用字等異動がある句についてのみ述べる。

第三頁　ほう可（か）んの／どうげ窶れや／みづつぱ奈（な）

この句、「幇間」「道化」が仮名書きで、「道化」の「化」は「げ」と濁っている。普段から太宰が濁って発音していたものか。太宰が、「どうげ」と振り仮名を付しているものは管見の限り見当たらない。なお、「どう」は、正しくは「だう」。

第二十一頁　亀の子／われ尓（に）問へ／春ち可（か）きや

「に」が変体仮名「尓」、「近き」が、変体仮名混じりの仮名書きになっている。

四　むすび

太宰の俳句は、他にも書簡や小説中に、また戦中、戦後を通じて多少見ることができるが、朱鱗または朱麟と号し凝った割には質量ともに貧しい。しかし、太宰文学全体（人生観・文学観も含め）との連関で見ると疎かにはできない。自筆句集「亀の子」もそういう視点から読んでみると掬すべきものが多い。

（青森県近代文学館評議委員会委員）

資料集　第十三輯

太宰治・句帖「亀の子」

発行日　令和五年三月十五日

編　集
発　行　青森県近代文学館【青森県立図書館内】
〒030－0184　青森市荒川字藤戸一一九－七
TEL　〇一七(七三九)二五七五

印　刷　青森コロニー印刷

禁無断転載